

うたごえ新聞

3 / 1
〈月曜日〉
NO. 598 (1976年)

THE SINGING VOICE OF JAPAN

日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行 東京都新宿区西大久保3-60
☎03 (209) 0638-9 うたごえ新聞社
振替口座 東京2-5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行
1部60円 (〒15円)・月250円 (〒75円)

2面

全国総会

3/1/28

開催

キラパジュン来日

4面



緊急報道

キラパジュン

感想1

いまペンを握っている。握っているが書けない。あの胸の高なりを、澄んだ歌声を、どう表わしたらいいのか、ペンはすすまない。

私は、来日三日月に行なわれた「キラパジュン 歓迎青年集会」に参加していた。

チリ人民支援、民主チリの使者、フアンスタを告発するサンパブルー―百も承知していたことを、私は一もわかっていなかったことを反省している、いま。

の前の叫び声が対比されて、彼らの歌は、「歌」を越えて聞こえてくる。

あ、なんとこの歌声だろ。か。けして、大げさな誇張をするでもないのに、その歌声は、ビリビリと胸にささって、私には目の前で聞いている。

これがチリか、これが軍事フアンスタを告発する使者か、ビクトル・ハラのことをこれだっただか、私は百も承知していたつもりなのに。

サンポーニヤ(長さの違う細い竹を横に何本か結んだ、笛の一種)を吹くリーターのガラスコドラゴスの二人、息をふきかけたそのまの音は、素朴な言葉がほしい。(米)

この胸に迫る歌声

「チリの新しい運動」の真髄を聞いた。

ヨーロッパ各国はもちろんだこと、世界各国への演義旅行で絶賛を博し、数かずの賞を受けているキラパジュン。

彼らの中には、言葉の壁をのりこえて、聴く者の心の中に直接うったえるものがあった。

哀しゅうのあるケーナ(のびのびき、サンポーニヤの音階に、まだ見ぬチリの風景がうかぶ。黒い衣に身を包んだ、七人のヒゲ男のうたごえは、時には、哀しゅうをおび、チリに残した安否もわからぬ肉親を思うかの

感想2

ように切せつと呼びかける。力強い合唱は、ピチエット軍事政権のもと、いまも聞いているチリ人民を代表し、フアンスタへの怒りをたぎらせてひびく。

歌のあいだには、かわるがわるのうたごえに立つ。歌の背景を、ユーモアを交えて、そしてチリの民族楽器を、聴衆にわかりやすく説明する。

親しみのある話に、すばらしいうたごえに、会場は、いやがらうにも引き込まれてゆく。「ティオ・カイマン」(ワニの小父さん)「ラ・パテラ」(洗濯桶)などには、会場もともに

うたごえ。アメリカ帝国主義への風刺をこめて、力一杯「ティオ・カイマン」を。

「真実の革命家は決して死ぬことはない」これは、私たちが友人であるビクトルの言葉です。私たちは今、この言葉をビクトルにささげて歌います。

ビクトル・ハラ作による「魂は旗にみだされて」に、彼らは、こっぴどいさつした。静かに、そして、力強く……。

「兄弟なる友よ、きみは眠ってはいない。きみの心は春のさざしを聞いている……」

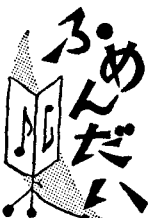
そこできみは顔を日に向けて埋められ、新しい土が種子となった君を隠す。根は深く地中に沈み、やがて生まれてくることだろう……。

北海道のうたごえ編

4.

ニュース・ポイント

音楽会報/若者に店を開放する経営者/吉田美奈子C
うたごえのうたごえ全国総会案内
声のよくなるお話し/林学創作裏話/あなたも名作曲家
〈特別取材〉30キャンペーン
走馬燈II長野・京都・福岡・大阪/映画音楽の45年
親子音楽会「この指とまれ」
紹介・創作曲「父ちゃん今日もしっかりね」/奇蹟の風



銀座のMデパート裏に中・高校生の人山。と一合の車が出てきて、中高生たちはスターを追いかけた。車道に飛び出し、信号を無視して車を追うのは、みんな女学生といふことには気がつく。

二月のある午後、羽田空港に七人の使者が到着。とりまく若者の間から「アッシュンデ」ともに「の合唱」。

「来日した折の、あの空港の歌声が忘れられない」と七人のキラパジュン。

テレビ番組「スター誕生」に、一日六千通の申し込みがある。一夜にして注目の的となるを夢みる若者の多さ。有名人の所属事務所前は今日も人の山。

四十三人の生徒に、一人残らず音楽の楽しさを教えたい、それを追う「先生、子どもの二重唱」。記者と文通を始めようという生徒も現れた。

音楽に感づかれた人びと。「運動には対象が無限にあることを知る。(米)

2面

3面

4.

5面

6面

7面

8面